

以下は、初期仏教におけるシャーリプトラ（舎利弗）の役割を、Alexander Wynne の「二つの哲学」説を中心軸に、近年の文献学的証拠と最新研究を突き合わせて再検討した深層分析です。論点は、(1) 心の哲学と瞑想論の二系譜（舎利弗系＝止観と洗練された心、マハー・カッチャーナ系＝身体性と「裸の認識」）の実在性、(2) それを支える本文証（MN 18, DN 2, MN 74, MN 111 ほか）と阿含・ヴィナヤ比較、(3) ウパニシャッド影響の射程、(4) 阿毘達磨形成における舎利弗モデルの位置、(5) 「二道説」批判への応答、です。

要点のまとめ

- Wynne は、初期仏教に二つの異なる心の哲学と解脱論があると主張する。すなわち、舎利弗を担い手とする「止観 (calm-insight) 系」と、マハー・カッチャーナを担い手とする「裸の認識 (bare cognition) = 非概念的・身体基盤のマインドフルネス」系である。前者はウパニシャッド由来の心モデルの流入により成立した後発の枠組み、後者がより早期の理解だと論じる。Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹
- この二系譜を支持する本文証として、Wynne は「身体に根ざす識 (viññāṇa)」の解釈 (SN 2.26 「一尋の死体 = kaḷevara」、saviññāṇaka kāya) や、MN 18 におけるマハー・カッチャーナの認識連鎖 (受→想→尋→戯論) 解析、DN 2 の四禅から「心を向ける」操作による解脱智の叙述、MN 74 に見える「乾いたヴィパッサナー」風の解脱描写等を配列して、後者 (非概念・身体性) 対前者 (止観・精緻化) の対比を描く。Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹ [suttacentral.net²](#) [suttacentral.net³](#) [suttacentral.net⁴](#)
- ただし、Anālayo は「二道説」自体を、(四諦の理解＝純知的、禅定＝それ自体で解脱) という西洋的な「思索家 vs 神秘家」対立の投影に過ぎないとして批判し、初期経典はむしろ寂靜 (samatha) と観 (vipassanā) の相互補完を前提に道を描くとする。禅定は単独では誤認の危険があり、智慧と結合してはじめて実を結ぶという諸経の合意に注意を促す (梵網経の禅定者の誤見批判など)。方法論的には巴・漢比較に基づく史料層位の弁別が必要とする。JOCBS⁵
- 阿毘達磨の成立問題では、舎利弗が主役の MN 111 (Anupada Sutta) が、用語 (anupada, vavatthita) や心所リストの接合・重複の仕方などから比較的后代的で、アビダルマ的分解の先駆を示す「窓」と評価される。あわせて「一切知 (omniscience)」の仏への付与は後出であり、阿毘達磨の総覧化志向を後押しした可能性が高いと論証される (Tevijjavacchagotta-sutta)。この

二点はいずれも舍利弗像と阿毘達磨の結びつきを強く示唆する。University of Hamburg⁶ Hamburg Buddhist Studies⁷

1. Wynneのテーゼ：二つの哲学（舍利弗＝止観／マハー・カッチャーナ＝裸の認識）

- 舍利弗系（止観・精緻化モデル）
 - 四禅によって「心 (citta)」を清浄・柔軟・不動に仕立て上げ、その「心に向け (abhinīharati, abhininnāmeti)」破漏智に適用して解脱を果たすという図式 (DN 2)。ここで心は対象に対して能動的に向けられ、超日常的な知に到る媒体として前提される。suttacentral.net³ Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹
 - MN 74 では、舍利弗が四禅を経ずに「理解を通じて諸法を捨離すべし」との熟思のさなかに、執着なき解脱 (citta-vimutti) に至る場面が描かれる。Wynne はこれを「乾いた洞察 (dry insight)」のプロトタイプとして挙げ、止観伝統内部の多様性（瞑想を必須としない解脱叙述）も併記する。suttacentral.net⁴ Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹
 - ウパニシャッド的心モデルの流入（下記 §3 参照）に支えられ、意識の精緻化・純化と「理念の直観」あるいは「非経験 (saññāvedayita-nirodha)」への跳躍を同一スペクトラム上に置くのがこの系譜の特徴だとする。Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹
- マハー・カッチャーナ系（裸の認識・身体基盤モデル）
 - MN 18（蜂蜜塊経）におけるカッチャーナの展開は、六識→接触→受→想→尋→戯論 (papañca) という認識の上昇相を描き、苦の精妙な認知的根（概念化の氾濫）を断つべき問題として特定する。ここでは「本質的な認識主体」は想定されず、対象への注意や思考は高次の段階においてのみ生起する。したがって解決は、素朴な経験＝「裸の認識」への注意にある、と読める。suttacentral.net² Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹
 - 「身に具わる識」 (saviññāṇaka kāya) や「一尋の死体 (kaḷevara)」に世界の生滅道を措定する語り (SN 2.26) により、識は身体性から不可分で「前 - 知的な可感性 (pre-noetic transitive sentience)」として全身に分布する、とする解釈が支持される。これは梵網経の「如来の身体は存するが有結 (bhavanetti) が断られた」という難文のソーマティック（身体的）読解とも鳴き合う。Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹

小結

Wynne は、カッチャーナの「身体に根ざした裸の認識」を初期的な理解、舍利弗の「精緻化された心を手段にする止観」を後発的（非仏教的影響の流入後）な理解と位置づけ、舍利弗＝止観伝統の規範性に疑義を呈する。Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹

2. 本文証の検討：パーリ／阿含比較と諸経の読み

- DN 2（沙門果経）
 - 四禅から「心に向ける」→破漏智という定番構図。Wynne は止観伝統の概念的な中核とみる。suttacentral.net³ Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹
- MN 74（長爪指経）
 - 舍利弗の解脱は熟思（paṭisañcikkhati）の最中に「執着なき心解脱」が成立する——禅定手続きの不在という点で「乾いた洞察」の典型例とされるが、これをもって「洞察のみの道」が普遍的であったとは言えない（後述のAnālayo批判）。suttacentral.net⁴ JOCBS⁵
- MN 18（蜂蜜塊経）
 - カッチャーナの連鎖分析は、papañca-saññā-sankhā（概念化・表象・記名の氾濫）が苦をもたらすメカニズムを示す。Wynne は、ここに非概念的・受動的な現在覚知（bare cognition）を重視する実践理路を読み取る。suttacentral.net² Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹
- 梵網経（DN 1）と「禅定者の誤認」
 - Anālayo は、梵網経と諸並行における四禅の誤認批判（禅悦・安楽を「最高善＝涅槃」と取り違える）を引き、禅定それ自体が自動的に解脱をもたらすとの見解を否定。定と慧の結合が前提だとする（巴・漢比較に基づく）。JOCBS⁵
- 阿含比較の方法論
 - 「二道説」全般の評価に際しては、巴・漢（中阿含・雑阿含等）の対校比較で共通基盤を抽出する史料批判が不可欠、とAnālayo は明示する。止観の二分は注釈学以降の明確化で、初期段階では相補関係として語られることが多い、と論じる。JOCBS⁵

3. ウパニシャッド影響をどう測るか：Gombrich と Bronkhorst の射程

- Wynne は、止観解脱論（心の精緻化→洞察）が「初期ウパニシャッドからの心モデル」を共有し、仏教初期相には見られないフレームが後発的に浸透し

たと論じる。ブリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド IV.4.23（静・調伏・寂・三昧→見）は、用語法レベルで仏典と同相だと指摘する。Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹

- Gombrich は、仏教初期思想におけるウパニシャッドとの相互参照・転用の多様な例を提出し、通文化的な思考連関を積極評価する（例：比喩・語彙の借用）。wiswo.org⁸
- Bronkhorst は逆に、仏教・ジャイナ教などが芽吹いた「グレーター・マガダ」文化圏とヴェーダ圏の相違を強調し、自己知による解脱観（行為不受の常住我）はむしろマガダ系宗教文化の産物で、のちにブラーフマナ文献へ取り込まれた可能性を論じる。仏教はこれを知りつつ採らなかった、とする。Wynne の図式を補正する地域文化論である。jainworld.jainworld.com⁹

批判的評価

- 止観解脱論とウパニシャッド語彙の重なりは確かに顕著で、舍利弗＝止観系というWynneの配当はテキスト上の相関を得るが、因果方向（仏教→ウパニシャッド／その逆）や媒介（マガダ文化→両者）については議論が割れる。Gombrich の通文化志向と Bronkhorst の地域文化志向の双方を踏まえると、単線的な「流入」説だけでは捉えきれない。wiswo.org⁸
jainworld.jainworld.com⁹

4. 阿毘達磨形成と舍利弗：MN 111 (Anupada Sutta) の示すもの

- 用語と構成
 - anupada, vavatthita 等の語彙、心所リストの「二系統の接合」に由来する不整合や重複（第三禪でsati重複など）は、アビダルマ的整理への移行期の編集痕跡を示すとされる。MN 111 に並行経がない事実は直ちに後世性を証しないが、比較史料に乏しい分だけ復元力は弱い。総合的には「比較的後代」の評価が妥当だとAnālayo は結論する。University of Hamburg⁶
- 「洞察ジャーナ (vipassanā-jhāna)」論の再点検
 - 近現代の「洞察中のジャーナ」正当化の論拠としてMN 111が援用されるが、Anālayo は、禪定の構成要素が消滅・生起しているなら、その瞬間はすでに禪定から出ているのであり、「禪定の内部で生滅を観ずる」読みは成立しないと反駁する (Vetterの古典的指摘を追認)。ゆえにMN 111 は、洞察と定の継起・結合の可能性を示すに留まり、「禪定＝洞察の場」の証拠にはならない。University of Hamburg⁶
- 一切知観念の後出性

- Tevijjavacchagotta-sutta では、仏は「常時不間断の一切知」を明確に否認し、三明のみを自称する。のちの「仏一切知」の付与が阿毘達磨の総覽志向（網羅性）を駆動した可能性が高いとされ、MN 111の分析的 성격と照応する。舍利弗はこの叙述の主演であり、阿毘達磨志向の舍利弗像が後代に強化された蓋然性が高い。University of Hamburg⁶

含意

舍利弗は、(a) 止観伝統の理想像（精緻化された心を「向ける」智の担い手）であると同時に、(b) 生起・消滅の微細観察を系統表に展開する阿毘達磨的分析の「顔」として物語化され、のちの部派・注釈における権威付けの中核に据えられていったと見られる。suttacentral.net³ University of Hamburg⁷

5. 「二道説」批判と調整：どこまで二系譜は立つか

- Anālayoによる主要批判
 - 四諦理解＝純知的、禪定＝自動解脱という二分は初期経の語りと整合せず、むしろ寂静と観の協働が標準像。梵網経系の誤認批判や、禪定者が欲に負けて還俗する危険（諸経）などは、定は自動的に智慧を生まず、慧との結合が要件であることを示す。巴・漢対校はこの像を広く支持する。JOCBS⁵
- Wynneへの折衷的評価
 - Wynne が摘出した「身体性に根ざす裸の認識」対「精緻化された心を用いる止観」という哲学的分岐は、確かにテキスト上に張力として痕跡化している。しかしそれを「解脱の二道」として制度的・教団内対立にまで引き上げるのは慎重を要する。むしろ実践の最終段での重心配置（非概念的覚知を強調するテキスト群 vs 定慧連関での理念直観を強調するテキスト群）の差異として理解するのが、巴・漢比較に照らし健全である。Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹ JOCBS⁵

6. 総合見解：初期仏教における舍利弗の歴史的役割

- 歴史的役割の再定義
 - 舍利弗は、(1) 止観伝統の「心を仕立てて向ける」モデルの権威的担い手、(2) 阿毘達磨的分析（心理作用の綿密な分解・配列）を先導・象徴する人物として物語化され、のちの学僧的・注釈的展開の「軸受」となった。MN 74 の「乾いた洞察」の場面や、DN 2 の典型的定慧連関、MN 111 の分析的叙述が、異なる場面でこの像を補強する。suttacentral.net⁴ suttacentral.net³ University of Hamburg⁶
 - 一方、マハー・カッチャーナのMN 18展開に見られる「裸の認識」「身体への根拠づけ」は、初期仏教の別系統の理路——概念的肥大を鎮め、

受・接触の「根」へと還る——を鮮明にしており、止観伝統一色の初期像を修正する強い根拠を与えている。suttacentral.net² Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹

- 学術的帰結
 - 舍利弗＝「智慧第一」は、注釈的時代の意味層（総覧的・弁別的知性）を多分に帯びながら、初期テキストの多声性の中で形成された称号だと再解釈できる。MN 111に見えるアビダルマ的志向、Tevijjavacchagottaの一切知否認、梵網経の禅定誤認批判などを総覧すると、舍利弗像は「理念直観の達人」かつ「弁別知の師範」という二重像で時代を横断して再解釈されてきたといえる。University of Hamburg⁶ JOCBS⁵

今後の研究課題（文献学・思想史）

- 巴漢対校の系統的適用
 - MN 18, DN 2, MN 74, MN 111 の中国語並行の全対校（SuttaCentralの「Parallels」一覧を起点に）を通じ、各テキストの層位・編集痕跡（用語・配列・反復）を再評価する。特にMN 111の語彙・リスト重複の漢訳側痕跡有無の点検。suttacentral.net² suttacentral.net³ suttacentral.net⁴
- ウパニシャッド影響の精緻化
 - Wynneの「語彙同相」論に対し、Bronkhorstの地域文化モデルを接続し、相互影響経路（マガダ文化→ウパニシャッドと仏教への並行流入）の可能性を事例別に再配線する。jainworld.jainworld.com⁹ Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹
- 阿毘達磨成立と舍利弗伝承
 - MN 111の後代性評価を補強・修正するため、部派アビダルマ文献（Vibhaṅga, Paṭisambhidāmagga）との用語・配列の対応表を作成。Tevijjavacchagottaの一切知否認の伝承史（並行経・注釈）も含め、舍利弗像が阿毘達磨的理論化の核へと収斂していく叙述史を再構成。University of Hamburg⁶ Hamburg Buddhist Studies⁷
- 実践論の橋渡し
 - 「裸の認識」理解（non-conceptual, present-centered awareness）が初期層にどの程度中核的かを、Aṭṭhakavagga等の短詩経群も含め横断検証し、止観伝統との統合モデル（段階論 vs 峰終論）を再提示する（Anālayoの定慧協働モデルを基準に）。JOCBS⁵ Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies¹

参考出典（本文中に逐次インラインで引用済み）

- Wynne, A. “Sariputta or Kaccāna? A preliminary study of two early Buddhist philosophies of mind and meditation.” *Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies* 14, 2018. [Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies](#)1
- Anālayo, Bh. “A Brief Criticism of the ‘Two Paths to Liberation’ Theory.” *JOCBS* 11, 2016. [JOCBS](#)5
- Anālayo, Bh. “The Tevijjavacchagotta-sutta and the Anupada-sutta in Relation to the Emergence of Abhidharma Thought.” 2020. University of Hamburg6
- Anālayo, Bh. *The Dawn of Abhidharma*. 2014. *Hamburg Buddhist Studies*7
- DN 2; MN 74; MN 18（本文・パラレル確認用）[suttacentral.net](#)3
[suttacentral.net](#)4 [suttacentral.net](#)2
- Gombrich, R. *What the Buddha Thought*. 2009（資料）[wiswo.org](#)8
- Bronkhorst, J. *Greater Magadha*. 2007. [jainworld.jainworld.com](#)9

補足

- 本分析は、Wynne の問題提起（舍利弗＝止観、カッチャーナ＝裸の認識）を、Anālayo の比較史料学的批判（定と慧の協働）で適切に「減衰」させることで、舍利弗の歴史的役割を「止観の権威・阿毘達磨の顔」という二重の軸で再定位する試みです。止観一色の初期像でも、裸の認識一色の初期像でもなく、初期仏教の多声性を舍利弗像の中に読み解くことが、今後の部派文献・阿含比較・注釈史研究の堅実な出発点になると考えます。 *Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies*1 [JOCBS](#)5